

長岡開府400年

vol.7

ROOTS 400

越後
長岡

<特集>

三島億二郎を

めぐる近代長岡の人びと



発刊趣旨
英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



フェリーチェ・ベアト(愛宕山から見た江戸のパノラマ)1863-1864年頃 鶏卵紙 東京都写真美術館蔵
写真家フェリーチェ・ベアト(1832~1909)は、イタリアに生まれた。世界各地の戦争に従軍し、様々な記録写真を撮影。日本には文久3年(1863)頃に来日し、元治元年(1864)の下関戦争にも従軍した。明治17年(1884)まで日本に滞在したベアトは、幕末維新期の人びとの姿と風景を活写している。この写真は、愛宕山(現東京都港区)から江戸のまちを撮影したパノラマ写真として著名で、中央の長屋塙が長岡藩牧野家の中屋敷である。藩主が住む上屋敷、藩主の私的な住居である下屋敷に対して、中屋敷は藩主の側室や子息が暮らした。三島億二郎は、幕末に江戸の屋敷を拠点とし、佐久間象山の塾で学んだ。維新後は、長岡復興の思いを胸に様々な交渉活動を東京で行った。江戸から東京へ、三島億二郎は移り変わるまちの風景をどのように見たのだろうか。



三島億二郎(みしま・おくじろう)
明治維新後の再興長岡藩大参事。文政8年(1825)に長岡藩士・伊丹市左衛門の二男として生まれ、のちに川島家の養子となる。始め鋭次郎、億次郎、億二郎。改名の由来は、浄土教の億万土の彼方にある浄土をさすらしい。小林虎三郎より3歳、河井継之助より2歳年長で、ともに藩校・崇徳館に学ぶ。北越戊辰戦争には軍事掛として参戦。戦後、姓を三島に改め、敗北した藩の再建を小林虎三郎とともに担う。廃藩置県後は柏崎県大参事、新潟県第十六大区長、新潟県古志郡長を歴任し、長岡洋学校(明治5年、現県立長岡高等学校)、長岡会社病院(同6年、現長岡赤十字病院)に、第六十九国立銀行(同11年、現北越銀行)などを開校・開設する。晩年は北越殖民社を設立し、北海道開拓に尽力した。明治25年(1892)、旧長岡城下の自宅で死去。日記は長岡市指定文化財(長岡市立中央図書館所蔵、長岡市史双書として翻刻・刊行)。悠久山公園の石碑建立にあたって「長岡復興の恩人」と称される。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸

巻頭言

北越戊辰戦争の戦乱がまちを荒廃させました。

その廃墟から立ちあがる勇気を三島億二郎は

私たちの先人に与えてくれました。

三島は、ながく続いてきた身分の違いを乗り越えて

互いに知恵を出し、人びとの思想を革新し、新しい復興の

技術力、つまり、イノベーションを創り出そうとし

しかも、三島億二郎がねらったのは

すぐに役立つ人間の潜在能力の覚醒でした。

応用の人間力といっても良いでしょう。

明治新国家の新制度を研究し

文明開化と殖産興業策を考え尽くした結果といえましょう。

そこに創造の力が加わって

地域に似合う新しい産業や多様な価値観の教育理念と

互助の精神が生まれていったのです。

人びとの英知を導き出して

長岡を豊かなまちにしようとしたこのような三島億二郎の情熱は

どこからくるのでしょうか。

そうした提案は、長岡らしい復興の推進力となりました。

三島が洋学校(現在の新潟県立長岡高等学校)の

創設にあたってこだわったものがあります。

未来を切り開く学生の英語力と

豊かな人間性の育成です。

そうした三島の姿勢を

次の百年のために私たちは学びたいと思います。

ランプを灯して



長岡塾創設者・政治家
小林雄七郎
一八四五～一九一

長岡藩火奈事
小林虎三郎
一八二一～一八九九

江戸末期の幕臣・政治家
勝海舟
一八二一～一八九九

慶應義塾徳島分校長
城泉太郎
一八五六～一九三六

政治家
大久保利通
一八三〇～一八七八

慶應義塾創設者
福澤諭吉
一八三五～一九〇一

実業家
渋沢栄一
一八四〇～一九三一

長岡商人
岸宇吉
一八三九～一九一〇

初代東京憲兵本部隊長
(旧長岡藩士)
三間正弘
一八三五～一八九七

衛生学会創設者
長谷川泰
一八四二～一九二一

東京専門学校
(現早稲田大学)創設者
大隈重信
一八三八～一九二二

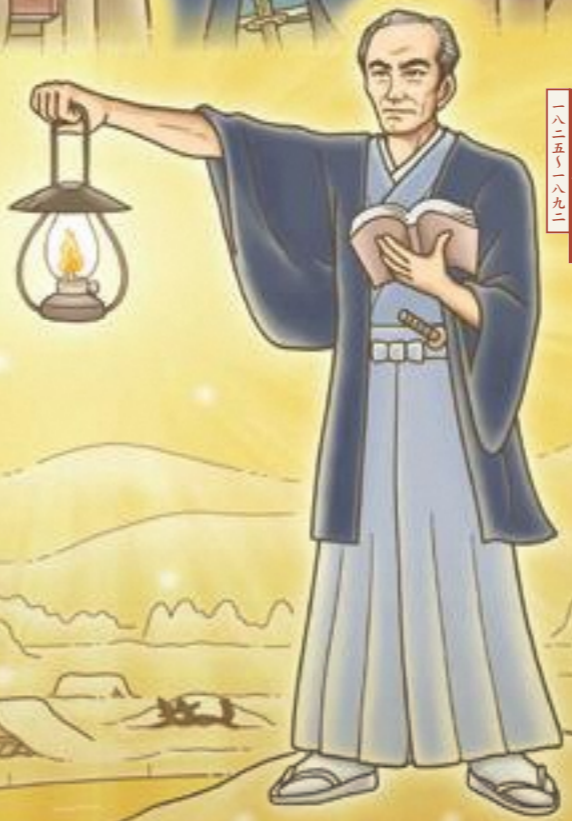
実業家
外山脩造
一八四二～一九一六

第六十九銀行初代頭取
関矢孫左衛門
一八四四～一九一七

地方政治家・実業家
久須美秀三郎
一八五〇～一九二八

新潟県会議長・
日本商店会連創設者
山口権三郎
一八八一～一九〇二

長岡復興の恩人
三島億二郎
一八二五～一九二二



雪深く 緑濃い山河を擁して
長岡城下と村々が息づいていた。
それが、戊辰戦争で廃墟と化して
まちは敗者の遺跡として
埋もれる運命にあった。
まちは復興に尽瘁した。
その情熱たるや、山のように気高く
海のように慈愛深い。
その復興策は流れにさからいつつも
自然と人間資源を、有効的に使った人物だ。
決して、驕らず、へりくだらず
真実のみを誠心を尽くしてみつめる人間。
学識を誇らず孤高な性格にもかかわらず
「三島さんなら協力しよう」
と慕われた人物。
地域の経済を復興し、発達させ
学校を興し人材を育み、医療の充実に
独自の目線で尽力している。
人間界の浄土を求め
北海道へ渡ったこともある。
三島億二郎の存在が、長岡が復興を
果たした一番の理由である。
それはまるで、廃墟からよみがえる
不死鳥のリーダーのようだった。
長岡と周辺の歴史風土は
三島億二郎とその協力者が創りあげた
理想郷である。
悠久山公園に三島億二郎の石碑が
建立されたとき当時の長岡市民は
五万五千人を超えていないにもかかわらず
一万二千人からの寄金が集まった。
長岡市民の復興の恩人
感謝の心がつまったモニュメントである。

三島億二郎が交流した人々

- 福澤諭吉、渋沢栄一、勝海舟
- 大久保利通、大隈重信、岩倉具視
- 山県有朋、伊藤博文、永山盛輝
- 藤野善蔵、小林虎三郎、小林雄七郎
- 鶴殿団次郎、城泉太郎、渡辺久馬八、秋山恒太郎
- 稲垣林四郎、三間正弘、森源三、加藤一作、横真一
- 柳野直、長谷川泰、土屋哲三
- 秦八郎、西郷侯、沢彦弥
- 岸宇吉、松田周平、鈴木鉄蔵、野本恭八郎
- 小林伝作
- 外山脩造、中村平作、大森佐平太、吉川庄蔵
- 遠藤六太郎
- 山田権左衛門、遠藤龜太郎、青柳逸之助
- 関矢孫左衛門、久須美秀三郎、山口権三郎
- 西脇國三郎、高頭仁兵衛、高橋九郎、山口万吉

(ほか多数)

経済復興をめぐる三島億二郎の人脈

野にあればおのがままなり蓮華草

戊辰戦争によって二千六百軒をこえる家屋が焼失し、まちが壊滅した長岡城下。激しい戦火が消えた後、藩士、町人が疎開先から帰藩し始めたのは収穫期を終えた初冬のことであった。多くの人びとは掘立小屋で寒さをしのぎ、その日の食事に事欠く惨状に打ちひしがれていた。

明治二年（一八六九）、長岡藩の大参事に就任した三島億二郎の使命は、八千五百余人の長岡藩士とその家族を飢えから救い、長岡の経済を復興することにあった。

億二郎は、明治新政府に救済を願うため東京・京都に足を運んだ。

しかし、救助嘆願を繰り返す億二郎に対し、新政府高官の対応は冷たいものであったという。

野にあればおのがままなり蓮華草
京都にのぼる道すがら詠んだといわれる彼の句には、長岡藩再興の重責を負ったものの、敗戦国として嘆願するしかないジレンマが滲み出ている。

「産物会所」と「女紅場」

今まで俸禄で生活していた士族階級を農業や商業の道につかせようとした明治政府の帰農・帰商政策は、当時の長岡藩では最大の課題であった。

明治三年（一八七〇）、高橋小路（現坂之上町二丁目）に「産物会所」が設立され、億二郎が頭取に就いている。

産物会所は、士族の女性に対して、当時国内の主力産業に成長しつつあった養蚕、機織りの技術指導などを行った。当時その監督の任を受けたのは士族の

森源三である。源三は、北海道開拓使に入り、札幌農学校長（現北海道大学）となる。

明治九年（一八七六）に設立した「女紅場」もまた士族授産を目的としていた。

女紅場も初め、士族の女性の中から生徒を募集し、養蚕、織物の技術のほかに、初歩的な読書、算数なども学ばせているところに、億二郎の女性に対する自主自立への思いが込められている。女紅場は、後に一般女性にも生徒の募集を拡大した。

自立復興の光「ランプ会」

殖産興業による復興を実現すべく、士族と町人の間に協働という意識が芽生えたのは、億二郎と長岡商人の岸宇吉の意気投合により生まれた「ランプ会」によるところが大きい。

その主な幹事は、士族では、三島億二郎、柳野直、森源三。町人（商人）では、岸宇吉、渡辺六松、目黒十郎、五十嵐藤蔵、野本清平、木宮静一郎、松田周平。神官の三芳野千春。地主の広川真広、山田権左衛門、近藤九満治・義門。鈴木訥叟らである。

戊辰戦争後の閉塞感のなかで、封建的な考え方が残る士族たちは何かにおいて町人を軽蔑し、町人たちは貧乏士族と心

てよう」と説いて回った。

明治二年の春に発足した「ランプ会」で使われたランプは、安政六年（一八五九）に長岡商人の鈴木鉄蔵が横浜から仕入れて来た日本で最初のものであるというが定かではない。新しい時代を照らす明るい光のもとに各界各層の長岡人が集い、東京や大阪の文明開化の大きな潮流、入手した舶来品の品評、長岡の自立復興策、新しい時代の商工業など、あらゆること

近代産業を発展させるために 銀行をつくらう

三島億二郎は、明治六年三月十日に国立銀行条例を手に入れている。はやくから銀行の導入が、長岡周辺の経済復興の引き金になることを知っていた。

明治九年（一八七六）八月、国立銀行条例が改正され、士族の金禄公債証書を抵当にして銀行紙幣の発行が認められることになった。

紙幣の増刷が地域の経済活動をより活発にさせることをとった三島億二郎は、長岡出身の小林雄七郎らと東京で会って長岡に銀行設立の許可運動を開始した。このとき、栃尾出身の外山脩造にも会ったらしい。

明治十一年四月、大蔵卿の大隈重信から設立許可をもらうが、小林や外山の協力もあった。



女紅場 養蚕の図（『陳観帖』）

の中で嘲笑し、両者の間に存在する見えない溝に億二郎も頭を悩ませていた。

新潟町に生まれた岸宇吉は、長岡表町の呉服商家の養子となった。商才に優れていた彼は十六歳の時に長岡初の唐物商に転業し家業を立て直した。

当時岸家のはなれには、小林虎三郎が居をかまえていた。

智者の一言は千金の値あり

虎三郎や億二郎から必死に知識を得ようとする宇吉には、士族との間の溝など眼中になかった。

億二郎は士族に「これからの時代は、士族も町人も関係なく商人のように働くことだ」と説き、宇吉は町人に「狭い町人根性を捨て、新しい知識を商売に役立

が話し合われたという。会を重ねた情報交換会は新たなアイデアを生み、いつしか士族と町人との溝は埋まり、士民協働によるまちづくりへの気概が培われていった。

ランプ会は明治十年（一八七七）頃に自然解散するが、情報交換、商売研究の重要性を人びとは痛感し、その後も数多くの商売研究会が設立され、長岡と周辺地域経済界の礎を形成して行った。

第六十九国立銀行の設立は、明治十一年十一月に大蔵省から開業免状と創立証書の交付をうけたことにはじまる。頭取には関矢孫左衛門（旧広神村、旧清崎（糸魚川）藩庄屋）、取締役兼支配人は山田権左衛門（旧三島町七日市、上山藩大庄屋）、副支配人に岸宇吉（長岡商人）、取締役には三島億二郎、遠藤龜太郎（旧深才村上富岡の地主）、青柳逸之助（旧河根川村庄屋）らであった。

創業当初の株主は全株主の約九十八パーセント、七八九人が士族であったが、ほかに商人八人、地主が四人、一見して士族銀行のようであったが、株数では商人が約十三パーセント、地主十二パーセントで商人や地主の協力がなくては設立できなかったことを物語っている。



長岡産業交流会館（通称・ハイブ長岡）内の長岡市産業展示室内に展示されているランプ会のジオラマ

近代医学をめぐる 三島億二郎の人脈

柳野直と長谷川泰

医療にも先見性を持っていた三島億二郎は、同郷の医師たちと親交を深めた。なかでも柳野直と長谷川泰の名は、三島億二郎の日記に幾度も記されている。柳野直は長岡会社病院（現在の長岡赤十字病院）の創設にあたって三島億二郎を助け、医院長を務めた。三島億二郎や岸宇吉らが長岡の未来を語った「ランブ会」のメンバーでもある。柳野直は堀金村（富曾亀）に生まれ、長岡藩の医学学校「濟世館」で学んだ。その後、緒方洪庵の適々齋塾を経て、長崎の精得館でオランダの医学を修めている。北越戊辰戦争の開戦を知ると長岡へ海路を急いだ、すでに長岡城



柳野直 (1842~1912)
『長岡病院六十年史』より



長谷川泰 (1842~1912)

は落城。領内の生活の困窮と伝染病の流行のなか、各地で手当てに奔走したことを自ら記録に残している。

長谷川泰は、開業医の養成学校「済生学舎」を東京に創設。済生学舎一校から、明治時代の開業医資格者の半数を超える七千余人を輩出した。また、育英団体「長岡社」の発起人の一人であった。長谷川泰は福井村の村医の長男として生まれ、良寛の教えを受けた鈴木文台の漢学塾「長善館」で学び、佐倉の順天堂ではドイツの医学を修めている。幕府典医の松本良順からは戦時の医学を学んでおり、家老河井継之助に抜擢され長岡藩の軍医を務めた。

甲野斐と小金井良精

甲野斐と小金井良精は少年時代に北越戊辰戦争を体験した。

甲野斐は長岡城下呉服町の眼医の家に生まれ、眼科医として宮内庁侍医にまで昇りつめた。因みに、東京大学医学部では、森鷗外と同級である。水害が多発した長岡では、溜り水から衛生環境が悪化し、人びとは眼病に悩まされた。その苦難もまた、甲野斐の努力を支えた原体験であったかもしれない。長谷川泰の済生学舎では眼科講義の教鞭を執っている。

城下今朝白の武家に生まれた小金井良精は、「米百俵の精神」で名高い小林虎三郎の甥にあたる。森鷗外の妹、喜美子と結婚した。十歳で目の当たりにした敗戦の苦難は、小金井良精の孫である作家星新一の著書「祖父・小金井良精の記」にも書かれている。日本解剖学会を創始した解剖学の権威である。専門分野の人類学ではアイヌ研究で学術に名を残している。

長岡会社病院の設立

医療は人的資源の確保

三島億二郎が社会的弱者のための病院設立に興味をもったのはいつ頃か定かでない。三島の日記にも、そういった起因となる記事が見当たらないが、貧しい人たちに深い愛情の気持ちをはやくから抱いていたことは日記からうかがえる。長岡藩の救助嘆願に東京に赴いた際の日記の末尾に聖書の一部を記したことも知られる。キリスト教は、当時文明開化と同時に日本に入ってきた。博愛がモットーだった。青少年少女のための学校などが全国各地で設立されたのは、こののちのことである。

三島億二郎が殖産興業策をすすめるにあたって、地方の風土病などの撲滅は大きな課題であった。そのために「病院を創ろう」と発想したことは自明の理であった。国漢学校に医学局を開設し、柳野直などの蘭方医を教授方に導入した。その病院設立を具体的に実施しようとした契機は洋学校設立時にふって湧いたような年貢米過納、返還問題が起ったことに遡る。

長岡藩領の上組、北組、西組、河根川組の村々は藩領を流れる信濃川の開拓による風土病に苦しんでいた。開墾

には風土病が大きくからんでいたのではある。

三島は、栃尾組を除く各組の代表者を集め、年貢過納の返還分を元手に病院と学校（洋学校）を設立することを提案した。明治五年（一八七二）はじめのことである。

病院計画では長岡町はもちろん、付近の村々の病者を対象に広く無料診察することにした。ただし、入院患者には、一日二十五銭と五十銭の二段階制を設け、薬料も廉価で運営することを提案している。

名称は元領内各組各村の拠金を基にしたから「長岡会社病院」とした。明



長岡会社病院 (写真は長岡病院時代のもの)

しかし、年々増加する患者数に比べ、県からの補助は何もなく運営に行きづまってしまった。そこで、三島は星野貫三（宮内）、川上喜右衛門（栃尾）、大森佐平太（日越）、吉川庄蔵（黒糸）などの各地の代表を集め、資本金の増加をはかっている。なお、長岡病院は明治三十二年に長岡病院組合となり、昭和六年解散。組合の財産は日本赤十字社に寄贈され、長岡赤十字病院となった。地域医療に貢献している。

思い切った先進医療 外国人医師を招聘する

長岡には、昔から刺されると腫れて死ぬという恙虫の風土病があった。明治になり、殖産興業策がとられると、信濃川の河畔などに栽培される麻の需要が俄かに高まった。麻をロープなどにして使うというのである。ところが、麻畑にはツツガムシという病原体を持つ急性伝染病の温床でもあった。

三島億二郎らは、明治十年、キリスト教の宣教師で医師のパームとベルツを新潟から呼び寄せて診療を行っている。当時、外国人は寄留地からでることが許されなかったが、三島は県に懇願して、ベルツの場合は、明治十年十月から翌年三月まで、長岡病院に出張診療してもらった。滞在は一月に一日か二日程度で、十ドルの謝礼が支払われている。外国人の出張診療もあり、恙虫病の研究はすすみ、川上清哉、甲野泰造ら名医を生んだ。そして、林直助・川村麟也の恙虫研究所が黒津村の願敬寺に設けられるに至った。



『北越商工便覧』川崎源太郎／著 明治22年 新潟県立図書館所蔵
商工便覧とは明治期の商家の様子や地域の各名所などを紹介するもので、全国の各地域ごとにまとめられている。『北越商工便覧』は上下2巻で上巻は万代橋の図、下巻は親不知の図から始まる新潟県内の商工業の案内書である。長岡町63軒、与板町2軒が掲載されている。紹介する図版は表五之町（長岡市表町）の業種商・平野屋太刀川善蔵の店舗。



水鳥爾保布画 水道タンクと信濃川

近代学校経営をめぐる 三島億二郎の人脈

教育は良い教師を揃えることから

三島億二郎は教育の充実が、長岡の復興を果たすと考えた先人の一人である。それも校舎建設よりも良い教師を育てることに躍起になっている。

旧長岡藩士で福澤論吉門下の藤野善蔵に執心し、再三、長岡に帰郷をのぞみ、ついに月給百二十円という破格の待遇で招聘することに成功している。

藤野によって、英語翻訳の本格的な授業が長岡洋学校で行われ、サーゼントの「読本」、パーレー「万国史」、ビネオの「文典」、クワッケンの「窮理書」などが使用された。カリキュラムは、英国史、大合衆国史なども含まれて、国際的な視野の広い生徒を育成するのに役立つたという。

漢学(儒学)の中心に位置したのは代々の漢方医から教育者に転じた田中春回だった。田中の論考に「国漢学校私議」があるが、その主張は「学校は政教の根本である。そこで人材を教育し、人材を諸官庁に登用する」というものがあつた。春回は漢学を学問の中心に据え、道徳教育を行ったので、のちに躰教育などを重視した女子教育の振興に功績があつた。

春回は三島億二郎が信頼した長岡学校の教師の一人であつたが、洋学の藤野善

蔵とは犬猿の仲であつたことが面白い。

その二人に長岡の教育理念を植えつけた小林虎三郎は、三島億二郎とは幼い頃からの友として、互いに維新の苦節をなめた。虎三郎と億二郎は年齢こそ三歳も上下はあつたが、子どもの頃からの交情が生涯つづいた仲である。同じ大参事として、虎三郎が教育理念をかがれば、億二郎はそれを実現してゆく関係にあつた。

億二郎が現実を直視し解決しようとするのに比べ、虎三郎は学問の理想を求めたから、二人の友情によって、のちの「米百俵の思想」が生まれている。

西郷葆は国漢学校開校以来の教職員で明治二年(一八六九)八月、田中春回のもとで教師心得に任命された一人である。その分校長岡小学校では西郷葆は習字を教えている。習字は小林虎三郎がもつとも力を入れた学科だった。西郷はのちに表町小学校の初代校長となるが、士族出身者が町人学校に赴任したのだから、ユニークな学習が行われたのだろう。

たとえば、西郷葆は自身が監修した裁縫の教科書などを編集している。これも三島億二郎の人事であつたろう。

阪之上小学校の初代校長の秦八郎は学校の「造営記」で、学校建設の費用は学

長岡洋学校の開校

三島億二郎は近代学校の創立を、復興の柱のひとつと考えていた。その近代学校とは師の佐久間象山が唱えた「西洋の芸術」である。つまり、洋学教育をはやくから企んでいた。福澤論吉、洪沢栄一、西村茂樹などと交友を結び、英語教育の充実が、長岡の経済の発展につながることを考えていたのだ。

明治三年(一八七〇)六月の日記をみると、福澤塾(慶應義塾)に行っている

旧長岡藩士藤野善蔵と東京で接触し、高額の遊学資金の提供を考えている。同時に盟友の小林虎三郎からも洋学教育を長岡で開校しないかと、東京から書簡を三島のところへ寄せた。

貢租米の余剰の返却は、三島にとって、絶好の機会であつた。その余剰米を持って、学校と病院を旧長岡藩政庁の建物を利用して開設する。当時、地方に洋学校はめずらしく、熊本にあるくらいのもの

区民全体の心血が注がれた結果だと述べている。秦は旧名を波多勤之丞という戊辰戦争時の小隊長であつたが、三島億二郎の京都、東京出張によく従い、三島の主張を聴いた教育者であつた。秦は斬新な教育内容を学校カリキュラムにとり入れて、生徒の実力の向上を狙っている。秦の教育理念は多くの逸材を長岡に生むことにつながっている。

郷村の学校でも多くの旧長岡藩士たちが教育者として、郷校、小学校、私塾な

どに赴任した。これらは士族の救済と違ってしまえばそれまでだが、士族の教養が郷村に浸透し、人の知力、学力の向上につながった。

三島億二郎のすすめもあつて、すすんで辺りな地方に初期学制の際に教師として入って、教育を推進した。片田校、福島校、宮内校、摂田屋校、富島校、西片貝校、浦瀬校などは三島億二郎が柏崎県大参事、第三大区長時代に設立された学校であるが、いずれも長岡藩士族が教師となつている。休校後、再び、

七年に開校した浦瀬校などは元大参事の牧野頼母が、戊辰のときのお詫びをしたとして初代校長となつている。また明治五年に開校した大蔵校、上除校、才津校、下条校、巻島校、川崎校、中沢校、四ツ屋校、蓮湯校、片川校などにも、三島の薫陶をうけた旧長岡藩士族たちを教育者として送った。それは旧長岡藩領内だけでなく、まらず、中魚沼郡や南蒲原、古志(栃尾)などにも及び、多くの人材が郷村の学校経営に携わる結果となつた。



阪之上小学校 片山翠谷画(『陳親帖』)

だったが、英語教育、科学、地理学などに誘われて、士族ではない元町人の子弟も十五、六人入学している。そこに月給百二十円の藤野善蔵が赴任して、英語の原書を読んだものだから、三島郡越路(現長岡市)の僧侶の息子井上円了などが入学している。

三島億二郎は開校した洋学校、開設した病院に半日ずつつとめ、経営の健全化と学問の独立、人民への慈しみを忘れなかった。長岡洋学校は、幾多の変遷を経て現在の新潟県立長岡高等学校となり、その歴史を継承している。

普通(幼年)教育に力を注ぐ

明治四年(一八七一)八月、柏崎県は県の教育制度に初等教育(小学)を導入するため、学監に三島億二郎を任命している。学監は、学校の監督・経理・出納を担当するものであつたから、さしずめ校長兼事務長のような職であつた。

この月、国漢学校を廃した分長岡小学校が誕生したのである。生徒の多くは国漢学校修学者で百三十六人もいた。だが生徒はすべて士族の子弟であつたため、同年十月大橋佐平らが中心になって、旧町会所を校舎にし、長岡市中学校を誕生させている。

いずれの学校も士族が教師となり、いままでの読み書き、算盤のほかに、教材として『西洋見聞録』『西洋事情』『西国立志論』などが取りあげられていた。視野の広い子どもを育てるために、積極的に外国ものの教科書を使用していた。これらは、三島億二郎が出

張ついでに東京で見聞した文物や政財界の各士とつきあつた賜物が生かされる形となつた。

二つの基礎学力を養う学校は統合され、長岡分釐となつた。まず、生徒は上等・下等に分けられ、上等には講究科、解読科も設けられ、女子生徒も一〇九人入学している。

学校では、終日、半日、夜学などの生徒の実情にあわせて授業を行っていた。しかし、たとえ子弟であっても士族と商人の融合はむずかしく、明治七年十月分離移転し、阪之上小学校・表町小学校となつた。

三島は学校制度の充実を力を入れて郊外の各地に小学校をつくり、教養のある士族を教師にして送っている。郷村で教育を受けた子弟たちが、必ずや日本の殖産興業に役だつと期待して。



稲垣平助屋敷図(雪堂様鏡心院様御住居『長岡懐旧雑誌』)

長岡高等学校の前身「長岡洋学校」は、明治5年(1872)11月23日、旧長岡城内の長岡藩政庁の建物(現在のガトウ専科本店付近)を仮校舎として開校、翌明治6年5月23日、旧長岡藩筆頭家老稲垣平助の屋敷(現在の大手通交差点南西角地「東進」旧池津屋付近)を長岡洋学校の校舎としている。



長岡高等学校に残る洋学校当時の数学の教科書英語で数学を学んでいた

長岡市民になったお殿様

No.7

牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

牧野家の歴史

元和四年（一六一八）移封が決まった時、長岡藩は徳川秀忠から六万二千石の知行目録を受けている。初代藩主牧野忠成は將軍秀忠の側近く江戸で仕事をしていたので長岡へすぐに移って来ることはできなかった。長岡へ来たのは十二年後の寛永七年（一六三〇）六月と言われているが、一年たらずの滞在で寛永八年（一六三一）四月には江戸に戻っている。

忠成は長岡を治めるにあたり、検地担当者にその心得として「農民を大切にすることが治政の最善策である」と言っている。新田開発に力を入れて米の増収をはかるとともに、家臣達には三河時代から伝わる「參州牛久保の壁書」を守らせ質素儉約を奨励し、「侍の恥辱一七ヶ条」や「諸士法制」につながる藩風の基礎を築いた。

忠成は次男武成に与板藩一万石を、四男定成に三根山藩六千石を与え分知させた。忠成は長岡藩主のなかでは一番長寿で、承応三年（一六五四）十二月江戸で七十四歳の生涯を終えた。遺言に従って遺骸は長岡に運ばれ、栖吉の曹洞宗普濟寺裏の山腹に葬られ、高台から城下の街並みをいまでも見守り続けている。墓はきわめて大きく荘厳な五輪塔で長岡市指定文化財である。



普濟寺(長岡市栖吉町)の裏山にある牧野忠成と殉死者の五輪塔(長岡市指定文化財)

二代藩主は初代忠成の長男光成がなる予定であったが、家督を継ぐ以前に二十四歳で亡くなったため、光成の長男忠盛が二代藩主となった。忠盛は祖父忠成の偉業を継ぐにあたって名を忠成と変え従五位下飛騨守となった。治世は二十年。幕府の命により多額の費用が掛かる朝鮮通信使応接の役目を長岡藩として初めて果たした。江戸大火の復興作業にもあ

たった。国元長岡ではたびたび起きた信濃川大洪水と向き合い、領民の救済に務め治水第一に尽力した。

現代に生きる牧野ファミリィ

北越戊辰戦争から約百三十年後の平成八年、地元の財界人、長岡赤十字病院の関係者、市民が中心となり「三島億二郎像建立準備会」が設立され、平成十年（一九九八）千秋が原ふるさとの森に隣接す



平成10年10月18日、三島億二郎の誕生日にあわせての除幕式。日浦晴三市長(当時)をはじめ、小学生・建設関係者の嬉々とした表情が印象的。

る信濃川左岸堤防に三島億二郎翁の銅像が完成した。彫刻家元井達夫氏による高さ二・六メートルの青銅製で、書籍を開いて長岡市街を指さしている億二郎の姿である。隣の石碑には、釣りが好きであった億二郎の詩が刻まれて、信史漁夫と記されている。

除幕式当日は日浦長岡市長をはじめ近隣の多くの児童など関係者多数の出席により盛大に執り行われた。そのとき私は長岡藩再興時の三島億二郎と長岡藩十三代牧野忠毅のエピソードを思い出していた。北越戊辰戦争の時、慶応四年九月二十五日長岡藩は降伏を願い出た。三か月後の十二月七日藩の再興が許され、新たな藩主として第十三代忠毅(幼名鋭橋)が誕生した。当時十歳の忠毅は翌明治二年、再興を許されたお礼言上のため三島億二郎と共に一月十五日長岡から東京へ向けて出立し、一月二十七日東京永田町の拝領屋敷に到着。この拝領屋敷は約三千坪あり、現在は自由民主党本部と全国町村会館になっている。屋敷で衣装を改めた忠毅は狩衣姿で宮中に参内し、一人で接見の間に入り平伏して「有り難き御意、謹んで御礼申し上げます」と言上した。控えの間で聞いていた億二郎は無事に儀式が終了したことに安堵し、その後忠毅に「お約束の紙意をさしあげます」と言って涙を流したそうである。かねてより御礼言上が上手にできれば紙意を差し上げるという約束事が出来ていたようであった。

長岡開府四百年記念事業

次の百年へ新しい米百俵

平成三十年は長岡開府四百年

長岡市はいよいよ平成三十年に長岡開府四百年を迎えます。節目の年となる平成三十年を前に、米百俵まつりの歴代藩主登場や、藩主ゆかりの伝統文化イベント、栃尾、小国、与板をリレーした記念講演会など、イベントや市民参加の企画事業が、開府四百年の機運を盛り上げています。歴史や伝統・文化に親しむ事業をはじめ、地域の偉人や伝統に光をあてる企画、子どもを対象にする企画など、市民の想いが詰まった事業が実施されています。



たくさんの方の投票で決定したPRポスター

記念事業はこれからが本番。歴史や伝統・文化はもとより、スポーツや産業など様々な分野に事業の幅を広げ、「新しい米百俵」にふさわしい人材育成にも取り組んでまいります。

長岡開府400年記念事業へのご寄附をお願いします

長岡開府400年記念事業実行委員会では、100年先を見据えた「まちづくり、ひとづくり」を応援するため、未来投資募金を募集しています。長岡が誇る米百俵の精神を次代に継承するとともに、「新しい米百俵」と呼べるような教育、人材育成にむけた取り組みをすすめてまいります。この事業の趣旨にご理解をいただき、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

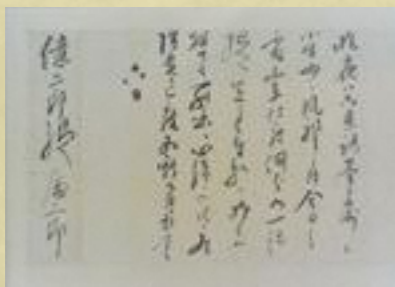
●ご寄附のお申し込み・お問い合わせは事務局
長岡市政策企画課 開府400年記念事業推進室
TEL.0258-39-2395へお願いします。

口座名義：長岡開府400年記念事業実行委員会
金融機関：北越銀行長岡市役所支店
口座番号：2027262

三島億二郎の人となりを知る 長岡高校記念資料館

大正四年三月長岡中学は寄宿舎を残して全焼し、貴重な資料の大半が失われた。同年十一月「長岡中学校文庫」(学校資料コレクション)設立。これが発展し「長岡高校記念資料室」となり、平成十六年には独立した「長岡高校記念資料館」となった。約一六〇〇点の資料を収蔵している。学校に残されたものと、多くの同窓生・学校関係者が寄贈してくださったものからなる。

河井継之助直筆資料三点(掛け軸・手紙) 小林虎三郎書簡一〇通(三島億二郎宛)、同掛け軸三本、三島億二郎書簡四通、同掛け軸一本などは、長岡の宝と言ってもいいだろう。これらは遺族などの旧蔵者が長岡高校(長岡中学)を寄贈するのに最もふさわしい場所と考えたからだ。その意味で長岡高校はたんなる学校に止まらず、同窓・市民を始めとする方々の最も信頼できる心の寄りどころでもあったといえるだろう。



小林虎三郎から三島億二郎への手紙

昨夜八脚来訪、幸多謝候。小生少々風邪二付、今日之知、不幸仕度、何分御一統様へ宜しく奉願候。明日八推ても罷出候心得二御座候。右得貴意度、如斯御座候。頓首 六日 億二郎様 虎三郎

長岡高校記念資料館
開館時間/AM10:00~PM3:00
休館日/土・日・祝日及び年末年始
所在地/長岡市学校町3-13-10和同館内
電話/0258-33-5114



三島億二郎レリーフ

三島億二郎は初代校長。小林虎三郎はその同志。創立当初長岡藩関係者の多かった学校にとって、河井継之助もまた精神的な支柱であった。「醫すゆかりの三葉柏、淵源遠きわが藩の、高き精神を新しく、ここに伝へ」と校歌にもある。長岡藩の意識されない時間的な水脈は、四百年前から現在まで流れついている。

長岡の宝は他に、井上円了の書・自筆漢詩集など、山本五十六の書簡多数・書写真など、堀口大學の手紙・書、橋本圭三郎、小原真、宮柁二、星野慎一などの資料もある。

開府四百年のあゆみ

No.7

いまから九十年前、三島億二郎の石碑が
市民の寄付により建立された



三島億二郎の碑
億二郎の没後その人格を敬慕し功績を偲び後輩ら1万1500余名が相談して悠久山に昭和2年に建立された。「三島君碑」と書かれた篆額は牧野家第15代当主で初代長岡市長の牧野忠篤による。

敬愛の証たるモニュメント

平成十年（一九九八）十月十八日、信濃川の堤防上に三島億二郎の銅像が除幕された。
三島のモニュメントは、悠久山公園の裏山（桜山）にもある。昭和二年（一九二七）十一月に除幕。「三島君碑」の題字がある高さ約四メートルの石碑である。撰文は、貴族院議員や日本石油株式会社社長をつとめた実業家・橋本圭三郎。書は工学博士・小山吉郎。「国漢学校、長岡中学校、長岡社、長岡病院、女紅場、六十九銀行等、皆翁ノ創設、若クハ参画セル所ナリ」と、三島の足跡を列記し、その存在を偲んだ。



信濃川、悠久山という長岡を象徴する場にたたずむ二つのモニュメント。いずれも大勢の市民有志の浄財により、三島の誕生日十月十八日にあわせて建立された。
長岡復興の恩人・三島億二郎の業績を、市民は今も忘れていない。



五言律詩「信江釣魚の詩」
三島億二郎像の隣に詩碑がある。億二郎は特に晩年釣りを趣味としていた。



『北越銀行史120年のあゆみ』より

第六十九国立銀行本店
（上）明治30年当時の本店。火災で焼失し、新築された。
（下）株式会社六十九銀行として新発足後、大正5年に建てられた本店。ネオルネッサンスを基調とした雄大な塔がシンボルマークとして長岡の名物のひとつになった。



柏崎市立図書館所蔵

三島億二郎像
三島の当時のまちづくりへの理念を表現するため、戊辰戦争後の長岡の復興を記した本を左手に持ち、長岡城があった現在の長岡駅方面を右手で指している。

千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩
ゆかりの地を
巡る探訪記

第7回
寺泊編

目に焼き付けた自然、肌で感じたい環境、後世に残したい歴史。それが揃っている町寺泊。



今年も米百俵まつりで順動丸隊として坂本龍馬役を演じた私が順動丸の痕跡を探しに寺泊にやってきた。順動丸とは、江戸幕府の輸送艦で勝海舟や坂本龍馬が乗船した経歴がある。

秋惜しむ
海の水面に
映る色
千也



順動丸と丁卯丸と乾行丸
寺泊沖で薩摩藩「乾行丸」と長州藩「丁卯丸」に挟まれ攻撃される順動丸

寺泊はアメ横や水族館や海水浴場がある港町の印象だった。でも歴史を紐解いてみると今までに見て来なかった寺泊が見えた。
順動丸が沈没した場所や寺泊港を一望できるビューポイント寺泊民俗

資料館には順動丸のシャフトや舷窓や砲弾なども収蔵されている。
海岸線から一本裏道に入ると旧北国街道と思われる道があり、石段を登り山門を抜けると本堂がある興琳寺に着いた。新政府軍の攻撃で飛んできた砲弾は本堂に残っている。趣のある山門の上には今なお町中に鳴り響く鐘がある。
興琳寺は山の中腹にあり寺の前には家々が立ちその先には海が見え、どこかで同じような風景を見たことがある。
鎌倉だ！風景がまさに日本の絶景スポット鎌倉に似ていた。
一歩二歩と奥の道へ足を伸ばしたら知らなかった寺泊の魅力を感じることができた。

興琳寺に飛び込んできた砲弾（右）
薩長艦船「丁卯丸・乾行丸」どちらから興琳寺に飛び込んできた砲弾。重量が約15kgと聞いたが持ってみるとかなり重い。



順動丸のシャフト（左）
イギリス製の蒸気船順動丸のシャフト。一本およそ4m二本並べたら横幅8mほどになる。鉄は剥がれてきているが迫力は今でも感じられる。

佐渡汽船発着所
町を一望する山、日本一の大河信濃川、時に荒々しく時に温かな表情を織り成す日本海。その全てが揃っている町こそが長岡。



寺泊民俗資料館の丘
船史家深滝弘氏に説明していただく千也。寺泊のこれぞ穴場、町港が一望できる。



寺泊民俗資料館から見た佐渡汽船乗場
順動丸は自爆の道を選び沈没した場所。今では佐渡汽船の発着所になっている。



興琳寺
今まで目にしなかった光景があった。興琳寺から見た先には海が見えた。



執筆：石丸 千也（いしまる かずや）
長岡で美容室を営み、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き思いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。

与板★中川清兵衛記念BBQビール園

中川清兵衛の出身地・長岡市与板地域でバーベキュービール園が夏季を中心にオープン。「風味爽快ニシテ」や本格バーベキュー、枝豆などの地場産野菜が味わえる。

所在地：長岡市与板町与板(たちばな公園内)



風味爽快ニシテ

冷製札幌麦酒

明治十年、札幌の開拓使麦酒醸造所で日本初の国産ビールをつくった中川清兵衛は長岡市与板町の生まれ。ドイツの製造法で低温熟成させた初号ビールは「冷製札幌麦酒」と名付けられ、在日外国人からも高評価を得た。当時の宣伝コピーは「風味爽快ニシテ健胃ノ効アリ」。ラベルには開拓使のシンボルである赤い

「五稜星」が描かれた。

明治十四年八月、醸造所へ行幸した明治天皇は大ジョッキに注がれた麦酒をお代わりされたとか。三島億二郎の日記には、明治十九年八月三日に清兵衛(三十八歳)の案内で麦酒と葡萄酒醸造所、蒸気糸系取機械を見学し、麦酒をご馳走になったと書かれている。酒好きの億二郎(六十一歳)もお代わりしたに違いない。

平成二十四年に新潟限定ビール「風味爽快ニシテ」が発売された。冷製札幌麦酒で追い求めた味を現代風に取りメイクしたものだ。しっかりとした旨味、新潟の食に合う爽やかなのどごしが特長。さあ、お試しあれ。

市民協働の精神

ながおか市民協働センター

長岡には昔から「士民協働」の先進的な気風があった。中でも、士族の三島億二郎と商人の岸宇吉に代表される「ランブ会」が象徴的に語られる。そして現在の長岡市で市民協働の一翼を担うのが、「ながおか市民協働センター」だ。

協働センターでは、市民・団体・行政が互いに活かしあい、支え合うためのノウハウを蓄積・共有している。窓口は、市の複合施設シティホールプラザアオーレ長岡の中。市民の日常に開かれた「ナカドマ」と呼ばれる開放的な広場から、エスカレーターを上ってすぐ右手の部屋だ。和やかな雰囲気、老若男女の姿が日々絶えない。二十代から三十代の若者



大小種々の市民団体が集う「市民活動フェスタ」の賑わい。

も多く見られ、身近なところから活動を楽しんでいる。協働センターは、周辺地区や合併地域にとつての交流拠点でもあるので、それぞれのふるさと自慢にも花が咲く。開府四百年を間近に長岡市はいよいよ元氣。世代・職業・地域、さまざまな立場をつないだ活動が、ふるさとの新たな百年に展開される。

ROOTS
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう
平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第7号 三島億二郎をめぐる近代長岡の人びと

次号予告/北越戊辰戦争

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成29年12月20日
平成30年7月15日 第2刷

編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄
石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業推進室内)
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp

制作/株式会社ネオス
協力/株大坂屋書店、長谷川泰を語る会、中山忠、関川忠義、長岡高校記念資料館、
普濟寺、(株)北越銀行、深瀧弘、興琳寺、佐渡汽船観光(株)、サッポロビール(株)、
長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館文書資料室